

ある地区における就学移行支援の変遷と課題 —教育的支援の充実と支援者を育てる自治体の取り組み—

村上 太郎¹・税田 慶 昭²

The vicissitude and challenges of support in transition to Elementary School for
children with developmental disorders

-The activities of local government in enhancing the support for education and
cultivating supporters-

Taro Murakami and Yasuaki Saita

要旨

発達障害者支援法や新学習指導要領等に基づく支援の必要性から教育現場では特別支援教育の充実が注目を浴びている。本稿では幼小連携の推進の観点から就学移行支援に着目し、発達障害を有する児童を対象とした就学移行支援計画づくりを目的とした教育委員会・福祉・母子保健が連携した自治体主導のキャンプについて検討した。就学移行支援計画の作成には幼小関係者をはじめ多職種の支援者そして保護者が関わり、チームアプローチの手法がとられた。実施目的や参加者の推移、参加者アンケートの結果からは、キャンプの継続に伴う就学を見据えた支援体制の充実、地域の教員の専門性向上という研修機能が示唆された。また、実際に作成された就学移行支援計画を記述内容から分類することで、就学後の学校生活や教科学習を見据えてどのような課題が想定されるか、そのためにどのような支援が必要と考えられたかを検討した。

I はじめに：就学前支援の拡充について

平成14年度に文部科学省が実施した発達障害に関する全国実態調査（通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査）から9年が経過する。その間、発達障害者支援法（平成17年施行）の早期発見・早期支援の方針や、新学習指導要領（平成20年幼稚園教育要領・小学校学習指導要領）での幼小連携の推進、発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業での幼稚園・保育園での支援の充実、など就学前の特別支援教育の拡充が謳われてきた。本稿ではその取り組みの一つとして、A地区の就学予定児を対象としたキャンプ形式の就学移行支援の取り組みを検討する。

¹ 九州大学大学院人間環境学府 Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University

² 北九州市立大学文学部人間関係学科 Faculty of Humanities, Kitakyushu University

II キャンプの概要

1. “療育キャンプ” から“就学移行支援キャンプ” への推移

本稿のA地区では乳児期から発達・障害に関する縦断調査を行ってきたが（大神, 2008）、現在の就学移行支援キャンプはその調査対象児の就学期を見据えた就学移行支援の取り組みが一つのきっかけとなっている。開催の度にその目的が検討・修正され、取り組みの内容は変化してきた。キャンプの目的の変遷についてはTable 1 に示す。

Table 1 療育キャンプならびに就学移行支援キャンプの目的の変遷

年度	主な目的
H18年度	<ol style="list-style-type: none"> 1. 保健・福祉・教育相互の組織的な連携強化 2. 乳幼児期から学童期までの個別カルテの作成とその必要性に関する保護者を含めた関係者の意識の向上及び相互理解を深める 3. 集中的療育による児童のコミュニケーション発達の促進 4. 保護者同士の交流を深め仲間づくりの場とすると共に、子どもへの接し方への気づきを促し、また、育児上の不安の軽減を図る 5. 関係者（学校・保育所・幼稚園他）の質の向上
H19年度	<p>「就学移行支援計画」の作成と個別の教育支援計画の見直し</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校などへの円滑な就学移行支援方法の工夫 <ol style="list-style-type: none"> (1) 成長記録ファイルの作成 (2) 就学移行支援計画の作成やその活用方法・引き継ぎの工夫 2. 教育、福祉関係者の専門性の向上 3. 学校、幼稚園、保育所等のスタッフ及び体制的な連携強化 4. 子どもの発達促進を目的とした教育 5. 保護者間の交流
H20年度	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学校等への円滑な就学移行支援方法の検討 <ol style="list-style-type: none"> (1) 就学移行支援計画の作成 (2) 個別の教育支援計画の見直し及び授業の改善 (3) 成長記録ファイルの充実・活用 2. 以降 H19と同じ
H21年度	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学校等への円滑な移行方法の検討 <ol style="list-style-type: none"> (1) 個別の就学移行支援計画の作成 (2) 前原市成長記録ファイル及び発達チェックシートの活用 (3) 個別の教育支援計画から就学移行支援計画の評価実施 (4) 個別の教育支援計画の相談の実施 2. 保健、医療、教育、福祉関係者の専門性の向上 <ol style="list-style-type: none"> (1) 発達チェックシートを活用して、専門性の向上に努める 3. 教育部門（相談含む）、保育所（園）、幼稚園、療育機関等の連携強化 4. 参加時の発達促進及び特性に応じた療育の実施 5. 障害児をもつ保護者間の交流を深める

平成18年度に始まった“療育キャンプ”の主な目的は、保健・福祉・教育の組織的な連携を強化することであった。加えて、相互連携を図るために必要な情報として対象児の個別カルテ（「教

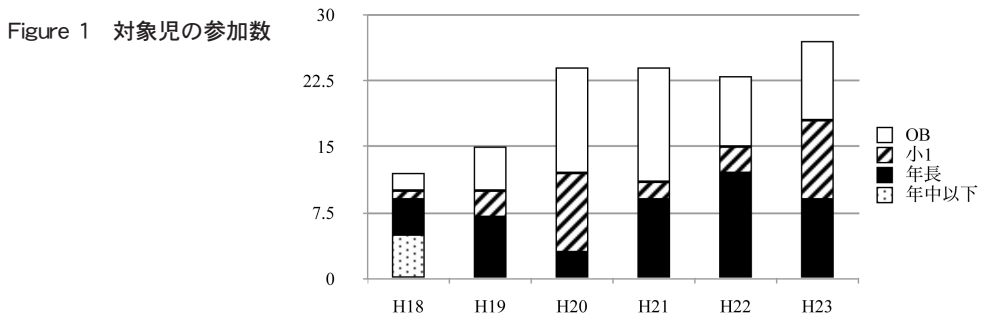
育支援計画」)を作成し、児の情報を共有する関係者のネットワークを構築すること、さらには保護者の気づきを促し、関係者(学校・保育所・幼稚園他)の児への関わりを向上させることを主な目的としていた。

平成19年では前年度対象児の支援計画の見直しを行う一方、小学校への移行支援という目的性を明らかにした「就学移行支援計画」の作成が主な目的となった。また、誕生からの成長や福祉・医療、教育上の記録である成長記録ファイルの作成にも重点が置かれた。続く平成20年度では名称も“就学移行支援キャンプ”として教育支援の目的がより明確にされ、教員参加者も多数を占めるようになった。就学後の具体的方策に向け個別に模擬授業を行う取り組みも試みられた。さらに、就学移行支援の重要な点として入学直後の時期に生活上の変化や教科学習において躓く児童が多いという意見から、平成21年度のキャンプでは「4月5月乗り切りシート」が作成され、生活面・学習面で予想される困難性とその手立てとが保護者や小学校教諭の意見を活かして話し合われるようになった。

平成18年度から始まった“療育キャンプ”“就学移行支援キャンプ”は、対象児そして保護者を支援していくためのネットワーク作りを構築すること、そのために児の現在の様子を発達的に把握・評価すること、という大きな柱を維持してきた。加えて、就学という大きな生活環境の変化を見据えた支援体制の確立をその変遷に窺うことができる。

2. 参加者の推移

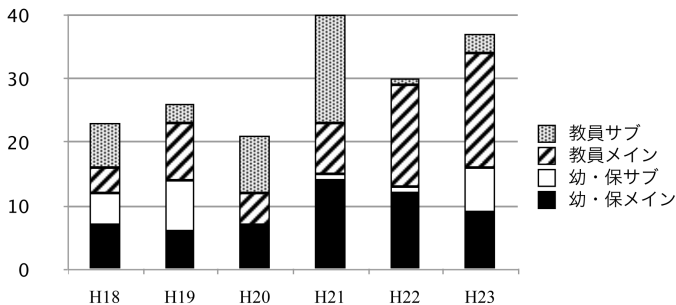
1) 対象児の参加人数 キャンプ参加児の数を比較した結果(Figure 1)、キャンプの目的性と共に参加者の年齢構成が変化していることが窺える。平成18年度は療育事業の既フォロー児である年中以下も対象としたが、近年は就学移行支援という目的性から年長児を中心としている。また、就学移行支援キャンプを経験した小学生(1年～6年生;OB児)を対象に、移行支援計画や教育支援計画等の確認・見直しを目的とした相談会(OB会)を担任教諭も交えて実施している。平成23年度キャンプには、中学校に進学したOB児の相談も行われ、今後は中学生にも対応した継続的な支援体制の構築が求められる。



2) 支援者の参加人数 キャンプの最大の特徴は、子どもの就学に関する保護者の思いについて、多職種のスタッフがチームを組み多角的に検討を行う支援者ミーティング(干川, 2005)というチームアプローチの手法を取り入れている点である。保護者や子ども自身と共に、所属園の幼稚園教諭や保育士、受け入れ予定校の小学校教諭、療育担当の臨床心理士・言語聴覚士・作業療法士・臨床発達心理士、保健師や教育委員会、さらには特別支援学校教諭や社会福祉士、大学教員、小児精神科医など、多職種の支援者がそれぞれの専門性を活かしながら児の支援について検討を行っている。なお、キャンプは保育士・教員の研修としても位置付けられており、支援者は研修者と助言者という役割に分けられていた。

①研修者の内訳の推移 キャンプにおける役割として、児への関与・指導や支援計画作成を担当した研修者を「メイン」、関与や支援計画作成のサポート役割をとった研修者を「サブ」と定義し、保育士・幼稚園教諭と小学校教諭を対象に研修者数の推移を検討した(Figure 2)。その結果、平成21年度以降は小学校教諭の研修者数が増加し、児の移行支援を進める上で現関係者と関係予定者とが一緒に検討する支援体制が確立されてきたことが示唆される。加えて、教員メインの割合が高まっているが、就学に向け小学校の視点から支援計画を作成すると共に、受け入れ予定校に児を知ってもらい就学をスムーズに進める目的が反映された結果でもある。

Figure 2 研修者の内訳

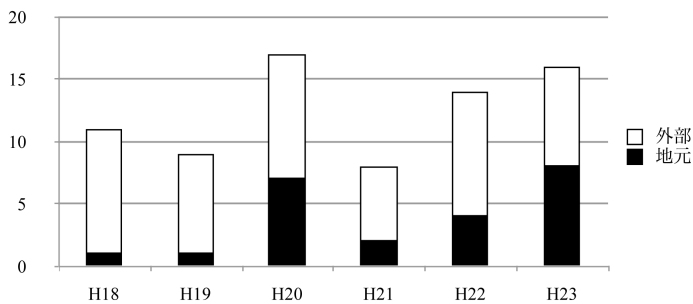


②助言者の推移にみる地域の人的資源の充実 支援計画作成を目的としたキャンプでは、保護者、児が通う幼稚園・保育園、進学予定の小学校など関係者間の気づきや意見を取りまとめたり、専門的立場から助言を行ったりする助言者役割が設定されている。

助言者について地域の人的資源の活用割合について着目すると、キャンプ開始当初は地元助言者が少なく地区外から専門職に助言者として参加してもらっていた状況であったことが窺える¹(Figure 3)。しかし、キャンプ継続に従い、特別支援教育を地元で担う小学校教諭がキャンプに例年参加する中で助言者役割を果たすようになってきた。地域性を把握した助言者が増える点で、ま

た、地域の人的資源の質・量を向上させていく目的に鑑みても、助言者役割を地域で担うことは重要な戦略として捉えられる。また、特記すべき点として平成23年度キャンプには初めて中学校教諭の参加が見られた。このことは対象児の中学校への移行を考える上で非常に重要な点であり、「地域総がかりの支援」(大神,2008)がタテに繋がっていくための重要な一歩であると考えられる。

Figure 3 助言者の内訳



III 就学移行支援計画で何が語られているか？

就学移行支援キャンプでは、就学移行支援計画を作成することが大きな目的である。移行支援計画は、問題解決モデル(干川,2005)を取り入れた個別の教育支援計画をベースに、「今のすがたⁱⁱ⁾」「ポラリス」「長期目標(3年後)」「就学までに取り組むこと」「入学後、考えられる課題」という観点から構成され、保護者と子ども、支援者によるチームアプローチの手法で進められる。本論では、平成23年度キャンプにおいて移行支援の対象となった年長児(9名)の就学移行支援計画を元に、対象児が有する難しさ、支援に対するニーズを整理し、考察していくことを目的とするⁱⁱⁱ⁾。

1. ポラリス

支援計画作成で大切なことは、当事者である保護者や子どもの思いである。「ポラリス<夢・希望>—子どもにとってかなうと幸せなこと」は保護者の思いを聞くものだが、児の将来のビジョンを皆が共有する重要性をもつ一方、続く目標や課題設定の基ともなる。ここでは「ポラリス」として挙げられた目標(保護者の思い)を記述内容によって分類し、代表的な記述内容を検討した。その結果、生活自立、対人関係、学校生活、余暇生活、就職といった観点に分類されることが示唆された(Table 2)。ライフスパンを通じて児の成長を願う保護者の思いが強く表れていることが窺える。

Table 2 ポラリスの記述例

-
- 生活自立について
 - ・大人がついていなくても、スーパーでの買い物やバスに乗って帰ってきたりできる
 - ・一人暮らしができるようになってもらいたい
 - ・自立した生活ができ、人に愛される人間になってほしい
 - ・自分のことを自分でできるようになってほしい
 - 対人関係について
 - ・人の気持ちのわかる、優しい子になってほしい
 - ・友だちをたくさんつくってほしい
 - ・自分の気持ちを人にうまく伝えることができるようになってほしい
 - ・相談できる人や話せる人がいてほしい
 - ・家庭をもって、幸せにくらしてほしい
 - 学校生活について
 - ・見通しをもって行動ができる
 - ・学校が楽しいと思って、登校ができる
 - ・わからない時は「わからない」ということができる
 - ・良いこと悪いことの判断ができるようになってほしい
 - 余暇生活について
 - ・趣味をみつけてもらいたい（いろんなものに興味を持ってもらいたい）
 - ・スポーツをさせたい（スポーツ少年団など集団でスポーツ）
 - ・歌が好きなので、好きなことをさせたい（太鼓など）
 - 就職について
 - ・自分の好きな仕事につければいい。子どもの好きなことを見つけてあげたい
 - ・自分で物を作る人（仕事）になってほしい（職人さん等）
 - ・自分の得意なことを伸ばして、将来に活かしていけるといい
-

2. 長期目標および短期目標の設定

長期目標と短期目標の設定は時間的尺度の中での具体的支援の検討を目的とする。

長期目標は「ゴール<長期目標>—今から3年後の子どもの姿」とし、長期目標が複数挙げられた場合は話し合い優先順位をつけた。さらに、長期目標の達成に向けて入学までに取り組むことを「ゴール<短期目標>」と設定した。短期目標では「1. 入学の頃までにめざす姿」「2. 入学に際して気になること」という項目で複数の目標を出し合い、各短期目標に対する支援の手立てについて考えられた。目標についての具体的な関わり方に加え、その支援を「誰が行うのか」についても検討を行い、児を取り巻く環境の役割分担を行った。長期目標および短期目標を記述内容によって分類し、代表的な記述内容について検討した(Table 3)。

Table 3 長期目標と入学までに取り組むことの記述例

長期目標 (3年後)	短期目標 (入学までに取り組むこと)	支援の手立て	支援の担当・場所
■対人関係、コミュニケーションについて			
<ul style="list-style-type: none"> 言葉が出る。親子での会話が成立する。 理解できる言葉が増え、他者と言葉を用いて働きかけることが増える。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな言葉(名前、出来事、感情など)にふれ、語彙を豊かにする。 言葉のキャッチボールを楽しむ。 ・したいこと・したくないことを適切に表現する。 ・要求(「貸して」など)や危険、困ったことを自分で伝えることができるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着ける場での絵本の読み聞かせの中で、対話を意識して行う(1対1)。 ・遊びや作業で答えに困らない質問での会話場面をつくり、会話を楽しむ。 ・怒った感情を出すことでは要求を通さない。叫ぶのではなく、絵・カード・ジェスチャー・言葉で伝えるように、周りが意識して関わる。 ・人への伝え方のサインを教える(手招きやジェスチャーの使用、支援者が単語で代弁して言葉と場面をつなぐ等)。 	<ul style="list-style-type: none"> 園・療・家 園・療 園・療・家 ST・療
■学校生活について			
<ul style="list-style-type: none"> 学校の生活リズムに合わせて生活ができる。 ・集団の中でルールを守って過ごす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活に合わせた起床就寝ができる。 ・友だちを見て行動するのではなく、学校や園でのルールを理解して行動することができる。 ・状況の変化に対応できる。 ・交代や順番待ちができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・起床就寝の時刻を決めた生活をする。 ・合図を決めたり、絵カードや写真を見せて知らせる。 ・スケジュールボードを使う。 ・事前予告を行う。予定を視覚的に提示(文字)。変更の欄を使って「へんこう」という言葉を経験的に理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 園・家 園 園 園・家
■情緒面について			
<ul style="list-style-type: none"> ・苦手なことに挑戦して、いろんなことができる。 ・トラブルになった時に自分なりに対処できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・できない、失敗、遅れるなどの不安に出会った時、いじける時間が短くなる。 ・友だち関係でのトラブルがあった時、言葉で謝る・許すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手なことに少しずつ挑戦し、成功体験を増やす。 ・大人が間に入り、原因や気持ちを整理し、次の行動を一緒に考えて行動を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 園・家 園
■社会的なルールについて			
<ul style="list-style-type: none"> ・集団の中でルールを守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・勝ち負けにこだわらず、ルールを守って仲良く遊ぶことができる。 ・何をしたら危ないかを考えて行動できる。 ・見通しをもって行動できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・勝ち負けだけでなく、参加姿勢(待ち方、友だちへの励まし等)で評価することを心がけ、考え方を多様にしていく。 ・いつも1番最初にさせるのではなく、待つ体験も意図的に取り入れ、順番を守ることやその大切さを教える。 ・行動を先読みして適切な行動を伝え叱られる経験を減らしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 園・療 園・療 園・家
■学習面について			
<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な勉強が分かり、学習に楽しく参加できる。 ・身の回りの物の名前を覚えたり、数を数えたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの物の名前や数がかかる。 ・自分の名前が書ける。文字が読める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物を使いながら、日常生活と関わらせて学習する。 ・保育園でも、日常生活の中で意図的に数に関わる活動を入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 療 園
■生活自立について			
<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのことができる(声かけがなくても)。 ・食事マナーが守れる(食べこぼさない・静かに食べる)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・着服、着靴が自分で正しくできる。 ・服をたたむことに関心を持つ。 ・トイレは自分でいく。後始末ができる。和式に慣れる。 ・使ったものを自分で整理できる。 ・スプーンや箸を正しく使い食べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・達成感を味わえるように褒めながら行う。できないと思いきまずに、挑戦できるような声かけに努める。 ・たたみ方を伝える(3回畳む程度のやり方)。大人と一緒に練習させる。 ・誰でも分かるトイレのサインを作る(腰・脇あたりをたたく)。 ・箸を使う機会を増やす。ものや数を決めて経験させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 園・家 園・療・家 療・家 家

注)「支援の担当・場所」欄の、「園」は児が通う幼稚園または保育園、「療」はA市で行っている個別療育事業、「家」「ST」は言語聴覚士の訓練を指す。

その結果、長期目標は『対人関係・コミュニケーション』『学校生活』『情緒面』『社会的なルール』『学習面』『生活自立』といった複数の観点において挙げられていた。長期目標『対人関係・コミュニケーション』では「言葉の理解」「言葉の産出」が挙げられることが多かった。それに対応する短期目標として言葉の理解では「いろいろな言葉にふれ語彙を豊かにする」「読み聞かせや遊びや作業の中で会話を楽しんでいく」など、産出では（怒りや痲癩のみの表出で済ませずに）「自分の意思を言葉もしくは絵カードなどの代替方法で他者に伝える」など具体的な手立てが挙げられた。『学校生活』では、「小学校に合わせた生活リズムを入学までにつくること」「集団でのルールや状況の変化に対応すること」などの短期目標が立てられ、入学前から学校生活に照準を当てた生活スタイルの練習を始めるとした支援計画も窺えた。『情緒面』『社会的なルール』では、児の気持ちに配慮した行動学習や自己肯定感や動機づけの向上を促す手立てが挙げられた。『学習』『生活自立』では、具体物を用いた指導方針などが挙げられた。

長期目標、短期目標を概観すると、対象児9名の知的水準、認知特性などは様々であるにも関わらず、対人的なコミュニケーション能力や社会的コンピテンスの獲得が入学前に達成すべき課題として共通に取り上げられている点は非常に興味深い。自閉症スペクトラムを中心とする広汎性発達障害を有する児にとって就学上の大きな課題が対人関係面での課題であることを再確認した。さらに、このような問題に支援者の「誰が」アプローチするかについても協議の結果から分担された。この役割分担により家庭、園、療育それぞれにおいてやるべきことが明確になり、就学への準備がより充実すると考えられる。

3. 4月5月乗り切りシート

就学移行支援を考える上で大切なことは、それまでの環境（主に園・家庭）から学校への移行である。就学支援の在り方を模索する中、入学直後の大きな生活様式の変化への適応が重要であることが指摘されてきた。学習面での躰きの重要性の一方、多くの子どもが学習へのレディネス、学校生活への適応という段階で躰いているとも考えられる。そのため、平成21年度キャンプより入学後に考えられる課題を「4月5月のりきり支援計画」として移行支援計画に盛り込むことになった。入学後に予想される姿や課題をチームで話し合い、「想定される課題」「短期目標」「支援の手立て」という項目に整理した。想定される課題および短期目標を記述内容で分類し、代表的な記述内容を示す(Table 4)。

Table 4 4月5月乗り切りシートの記述例

想定される課題	短期目標
<p>■環境への適応について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場所に慣れない ・トイレに戸惑う ・好き嫌いで給食が遅れることの心配 ・学級集団の中にスムーズになじめるかどうか ・放課後の過ごし方 ・学習場面における個別の支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活（場・生活リズム・人）に慣れる。生活の流れが分かる。 <ul style="list-style-type: none"> ①自分の靴箱や棚や机などの場所を覚える ②学校の1日の流れを理解して（指示がなくても）行動する ③自分の登校集団を覚える ・決まった時間に、残さず全部食べ終える ・周りの児童に本児の理解を図り、友達への安心感をもたせる ・安心して友だちと仲よく活動できる。意思表示ができる ・授業環境の整備 <ul style="list-style-type: none"> ①友達関係を考慮してクラス環境を整備する ②先生の顔と名前を覚える ③パニックへの対応を考えておく
<p>■授業・学習面について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生の話聞いて行動することが苦手 ・分からない時・難しい時は、笑ってごまかす ・体育や教室外の活動時、決まった場所にじっとして いない ・学習活動における不安（時間割、場所の対応等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの行動を見て次の活動に移る ・分からない時は、「わかりません」と伝える ・約束を守って運動や活動ができる ・自分のペースでの学習活動 <ul style="list-style-type: none"> ①スケジュールは自分で作る ②安心する座席位置にする
<p>■他者とのコミュニケーションについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だちに自分の思いを伝えることが苦手 ・自分の言っていることが伝わらず、自信をなくしてしま うのではないか ・悲しい、辛い気持ちの表現の理解。 ・遊びや運動の時、勝負にこだわりけんかしたりあきら めて避けたりする ・トラブルや困った時の情緒の安定 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者とのコミュニケーション手段と動機づけ <ul style="list-style-type: none"> ①理由を「はい。」「いいえ。」で言うことができる ②出来ることを増やし、自信をつける ③指さしや身振り、絵辞典など、補助手段を加えて話す ・いやだった事や辛かった事を伝える ・友だちと仲良く遊ぶことができる ・関わってくれる先生を知り、相談できる
<p>■健康面・安全面について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな行事前に熱を出して休む ・登校時の、道路への飛び出しの心配 ・下校時道草をして帰宅が遅くなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭・学校での体調への留意 ・安全に道路を歩くことができる <ul style="list-style-type: none"> ①横断歩道の渡り方 ②道を渡る前に「止まる」という習慣をつける ・友だちと真っ直ぐ家に帰る

検討の結果、想定される課題は『環境への適応』『授業・学習面』『他者とのコミュニケーション』『健康・安全面』の観点から挙げられていた。『環境への適応』では「場所に慣れない」「トイレに戸惑う」など場面適応や空間把握・位置関係把握に関する課題や、「好き嫌いで給食が遅れそう」「放課後の過ごし方」など学校生活や余暇での行動支援の必要性が挙げられた。『授業・学習面』では「学習中、集中して話を聞けない」「先生の話聞いて行動するのが苦手」など認知面や指示理解面の支援の必要性が挙げられた。『友達とのコミュニケーション』では「自分の思いを伝えるのが苦手」といった自己表現の難しさから生じる対人関係の問題への懸念が示された。入学直後の友人関係形成を円滑に進める上で、気持ちの表現手段の獲得と共に、担任等教員が事前情報に基づいて支援を準備し、子どもたちが躓かないで済むよう配慮することが重要であることが窺えた。

「4月5月のりきりシート」作成は入学式や学校生活のシミュレーションをしながら課題が協議される。ポラリス・長期目標からの短期目標では就学前の準備へと手立てが集約される一方、「4月5月のりきりシート」では実際の学校生活（通学や行事参加、学童保育など）に沿った課題が協議され、入学時の具体的な支援に反映させやすいといえる。近年の不適應の問題からは小学校に通い始めたばかりの時期にまずは躓かないことが、学校生活への適應の要とも考えられよう。また、新しい環境であるが故に予想がつきづらい学校生活での困難に対する上で、障害特性から考慮される課題も多く取り上げられていた。

IV 就学移行支援キャンプ参加者アンケートの検討と今後の課題

平成23年度実施の移行支援キャンプ参加者へのアンケートの回答内容を検討した^{iv}。

1. 保護者へのアンケート

アンケートは「今回のキャンプに参加されてどうでしたか？良かったこと、考えたこと、気になったこと、困ったことなど、率直なご意見・ご感想をお聞かせください」の1項目に対し、自由記述で回答を求めた。回答者はキャンプに参加した就学前児をもつ9家庭で、保護者は7家庭が父母の参加、2家庭が母親の参加であった。回答を記述内容により分類し、代表的な記述内容をTable 5に示す。

Table 5 保護者アンケートの結果

保護者 (N=9)	
1. キャンプを通しての感想	
<ul style="list-style-type: none"> ・就学予定の小学校の先生や専門家の先生と話ができて、小学校に対しての漠然とした不安がなくなった。 ・先生たちが親身になって相談してくださってとても心強かった。安心した。 ・友達とのコミュニケーションを心配していたが、先生たちにも詳しく伝わり少し不安が取れた。 ・不安を感じていた中で、1人で抱え込まなくてもいいと安心できた。 ・就学に向けてやる気がアップし、親も一緒に成長した気分。 ・今回のキャンプで色々な視点からたくさんの方から子どもの支援を考えていただき、就学先でどう伸びていくのか楽しみにも思えてきた。 ・先生方の経験談を取り入れたアドバイスはとても分かりやすく良かった。 ・今回のキャンプはとても未来への明るさをつかむ為に必要なきっかけだと思う。 ・スケジュール表を見た時は長いと感じたが、参加してみると中身も充実して時間が足りないくらいだった。 ・学校の先生がたくさん参加しており驚いた。校医の先生の話し合いの時間などがあればもっとよかった。 	
2. 子どもについての理解	
<ul style="list-style-type: none"> ・子どものこれからの課題がみえてきて、それを小学校の先生と前向きに今からできることを話し合い指導していただけたことがよかった。 ・実際にドリルや塗り絵、かるたなど積極的に楽しみながら取り組むことができるようになった。 ・保育園での等身大の姿を覚えていただけうれしかった。園での様子など改めて成長を感じられた。 ・歌遊びなど同じ時間を共有でき、他の友達とも意外と嫌がったりせず楽しくできたと思った。 ・作業（折り紙・ハサミ）など園と共に家でも取り組めば入学までには少しはできるかと思えた。 ・少しでも気持ちを伝えられるようになって友達と楽しい学校生活を送ってほしい。 	

3. 取り組みにおける課題

- ・事前記入の「成長の記録ファイル」は記入が大変なのでもう少し簡素化した方がよい。事前記入の記録が十分には使用されていなかった。
 - ・校区によって療育に関する取り組みや制度、熱心さに温度差があると感じた。どこでも人間関係やいろんな問題が生じるだろうが、一つずつ前向きにクリアしていくしかないと思う。
 - ・担任の参加がなかったのが残念だった。
-

アンケートの結果では、いずれの保護者からもポジティブな感想が述べられていた。小学校の先生や助言者との協議を通して保護者が就学後の見通しを持たせたことや、保護者の不安が軽減された様子が窺える（1.キャンプを通しての感想）。また、子どもの園での様子を聞いたり、子どもと改めて関わりを持ったり、子どもの行動の意味を理解することによって子ども自身の姿を捉え直してもいた（2.子どもについての理解）。

2. 支援者へのアンケート

アンケートは「1.今回のキャンプの取り組みで、良かったこと、整理できたこと、考えたこと、気になったこと、困ったことなど、教えてください」「2.今後のキャンプやA市の子育て支援の取り組みに期待すること、改善できることなど教えてください」「3.今回のキャンプについて、運営面でよかったことや気になったことなど含め、率直なご意見・ご感想をお願いします」の3項目に対し、それぞれ自由記述で回答を求めた。回答者を3つの群（学校教諭、保育士、助言者）に分け比較した。学校教諭は12名（小学校教諭11名・中学校教諭1名）、保育士は5名、助言者は12名（特別支援学校教諭3名・小学校教諭2名・福祉関係者2名・療育事業担当者5名）であった。

質問項目に関係なく記述内容により回答を分類した。代表的な記述内容をTable 6に示す。ここでは学校教諭の回答を軸に検討し、保育士・助言者の回答との違いも概観する。

Table 6 参加者アンケートの結果

学校教諭 (N=15)	保育士 (N=5)	助言者 (N=12)
1. キャンプを通しての研修効果		
<ul style="list-style-type: none"> 観察や保護者・園の担任との話から細かい実態把握ができ、課題や支援の必要が見えてきた。 助言者の保護者への聞き取りの仕方、担当した子どもへの本当に適切な支援のあり方など大変参考になった。 現在受け持っている学級の支援計画や指導計画づくりで悩んでいたのが、参考になることが多くて良かった。 知ったこと、学んだことを校内でぜひ伝えていきたい。 人材育成の面から地元の教師も助言者の役割を担ったのがよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもへの関わり方など助言者の先生に教えて頂いたのでとても勉強になった。 いろんな所属の先生方からの話をきくことができ、今後の保育に取り入れていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 療育課題について、具体的な指導や細かな実態の把握など他の先生の考え方が大いに参考になった。 学校の先生などの立場から専門的な意見を聞くことができてよかった。 家族や本人との関わり方、話を聞く聞き出し方、支援する方法、見方など勉強になった。 作業療法士として、身体的なことだけでなく、生活面や社会面など長い期間関わるが必要でないかと思った。
2. 保護者・子どもへの理解や支援		
<ul style="list-style-type: none"> 保護者が一生懸命頑張っていること、子どもへの思いを知ることができた。 保護者の願いや気持ちによりそうことの大切さが分かった。 支援計画の作成について多くの人が関わって作成されたその重みに分かり、親とももっと深くかかわって話していける安心感ができた。 父親の育児への参加、関わりをより持てるような会、集まりなどあればいいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 母親の関わり方、きつさを知ることができた。 参加したことで子ども・保護者とも同じ考えで同じ方向を見て支援できる。 園とは全く違う子どもの様子を見ることができた。改めて子ども達のことを考えられてよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者への聞き取りの難しさを感じた。 この取り組みをきっかけに、父親が自分の役割を認識できた。父親がよい方向に変わられた。 家族が行き詰っていることをオープンにできた。 移行支援計画作成で、キャンプ中に途中まででもできたものを提示できればさらに安心されると思う。
3. 小学校への就学移行について		
<ul style="list-style-type: none"> 入学後、スムーズに支援に取り組めることで、子どもも学校生活に安心して活動できる。 入学前、入学後、ボラリスと縦の系列で追って子どもの課題を見つけたことで、保護者の安心感を得られたと思う。 自校に入学した時のことを考えると、とてもよい計画ができた。見通しがもてた。 	<ul style="list-style-type: none"> キャンプを通して今できている事、できていない事を再確認できた。就学までに取り組むことが整理でき、引き続きの関わりを持っていこうと思った。 子どもの成長に向け、小学校(受け入れ先)の話や意見が聞くことができて良かった。 気になるお子さんがどんどんこのキャンプに参加できる支援が行われていくといい。 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども・家族にとって有意義な「個別の支援計画」が地域でできることを望む。 「就学移行支援キャンプ」「個別の支援計画」「個別の教育支援計画」の主催や位置づけを考えさせられた。 就学移行支援キャンプの日程は就学判定後に行う方が良い。 他の相談事業で対応した就学予定のケースを支援対象としなくよいのか。
4. 中学校への移行支援について		
<ul style="list-style-type: none"> 中学校に向けての移行支援が上手くできるように、計画作成の機会が設けてもらえたらと思う。 		<ul style="list-style-type: none"> 小中の連携について意味のある意見交流ができてとてもよかった。中学校の先生の意見がとても参考になった。 OB会などに、より多くの中学校の先生に参加してほしい。
5. 関係機関の連携について		
<ul style="list-style-type: none"> 色々な立場の方と一緒に支援の仕方について話し合うことができ、スムーズな就学の移行につながった。 助言者や園の先生方とも顔見知りになることができた。 子ども課の方や福祉の方々とも協議していくことの大切さを実感した。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校の先生の話から学校の職員体制を聞くことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 多職種の方々の意見を聞ける場がもてた。園の立場、療育の立場、家の中でそれぞれできること、目指すものがよく整理できた。 キャンプ対象児以外での話をすることや連携することができてよかった。 参加者皆の協力のもとにできているキャンプだということを実感する。

学校教諭は参加児の担当やその補助の役割を担ったが、感想にはキャンプでの研修効果が多く記述されていた。その中には、観察や聞き取りの際の他の参加者の視点や態度からの学びや、支援計画づくりの内容を通して自身の生徒の指導や支援計画づくりへの応用など、支援計画づくりをチームで取り組むことの効果が挙げられていた（1.キャンプを通しての研修効果）。また、保護者の就学や子どもに対する思いを知ることや、就学を前にした子ども自身に実際に相対することは具体的な支援計画づくりや個々の学びに寄与していると考えられた（2.保護者・子どもへの理解や支援）。

就学移行支援計画づくりに関して、保護者や学校にとって未就学の段階から協議する意義や就学後の見通しを持てるメリットなど、肯定的に捉えた意見がみられた（3.小学校への就学移行について）。これは保育士の感想でも、就学後の見通しを持って必要な保育活動を行える利点として挙げられていた。保育士にとっても毎日会う子どもへの関わりを再確認できる場として機能したと考えられる。

保護者や子どもの関係者が一堂に会する良さを挙げた意見も多かった（5.関係機関の連携について）。保護者や行政も含めそれぞれの立場と役割が整理され、連携や情報共有の必要性を個々の参加者が感じているようであった。連携では、保育士や助言者にとっても大きな成果として感じられていた。

3. アンケートに示された課題

保護者や支援者のアンケート回答に示された課題について取りあげたい。

まず、保護者からは就学移行支援キャンプ実施上の改善点が挙げられた。園の担任の参加や就学予定校の校医との面談希望など現在や就学後に関わる人に子どもを知ってもらいたい、話を聞きたいという思いが述べられていた。その他、子どもの情報について事前記入様式が多く大変である一方、それを十分に活用していないとの意見も出された。必要項目を絞り込んだ簡潔なものに修正していくことが活用の面からも必要かもしれない。

また、支援者からは中学校への就学移行支援の問題が挙げられた。ミーティング等で中学校への移行支援も重要なテーマとして協議された経緯もあり、小中の連携強化や保護者・子どもが中学校の見通しをつける意味でも中学校教諭の参加を求める意見が多く出された（Table 6; 4.中学校への移行支援について）。就学移行支援は福祉から教育への橋渡しの理念から始まったが、今後は中学さらには高校・社会へと縦断的支援システムの構築が必然的に求められることになる。

一方、支援の入口の議論も挙げられた。保育士や助言者からは、園などで“気になる”子どもたちや他の相談事業の対象児にも就学移行支援キャンプへの参加を拡大する必要について意見が述べられていた。就学移行支援キャンプへの参加には保護者の同意が必要であり、それ故に密度の高い支援の場として機能している。対象児を広げることと支援の質を保つこととの両側面を見据えての

検討が必要であろう。

4. 就学への橋渡しとして

文科省平成21年度特別支援教育総合推進事業趣旨では、幼稚園における支援体制整備が小・中学校に比べて大幅に遅れていることが指摘されていた。そのような現状を受け、幼稚園・保育園と小学校との連携や特別支援学校のセンター的機能の活用など、学習や発達上の困難をもつ子どもたちを就学の前段階から支援する体制がとられつつある。小学校は入学した生徒を指導するだけでなく、関係機関の連携の下で子どもや家庭の情報をより細かく把握し、就学準備を進めていくことが求められることとなろう。

本稿では実際の移行支援計画の内容等を概観することにより、就学移行期に課題として取り上げられるテーマを大別することを目指した。ただし、実際の資料を通して感じることは計画作成者が異なることにより、目標や手立ての具体性、重要視される点がそれぞれに異なるという事実もみられた。移行支援の情報の重要性を考える上では、就学後に就学支援計画の見直しの過程や就学実態の検討が必要と思われる。

機関連携に基づく縦断的な支援体制づくりは未だ展開を必要とする領域だが、子どもや家庭の立場からは誕生から滞ることのない支援が、当たり前の本来の姿ではないかとも思う。本稿で取り上げた取り組みは乳幼児期からの母子保健・福祉的な支援であると共に就学支援という教育的側面をもつことで子どもたちへの支援の継続を目的としている。これからも関係者の連携のもとに早期支援、特別教育支援の一例として発展させていきたい。

謝辞

就学移行支援の取り組みを先導してきた関係者の皆さまに敬意を表すと共にご協力を感謝申し上げます。

参考文献

- 千川隆 編 (2005). 通常の学級にいる気になる子への支援—校内支援体制と支援の可能性—「特別支援教育」ライブラリー, 明治図書出版.
- 糸島市 (2008). 平成21年度「発達障害幼児等に対する支援ネットワークモデル事業の構築」報告書, 日本財団助成事業.
- 糸島市 (2010). 平成22年度福岡県糸島市「発達障害児等に対する支援ネットワークモデル事業の構築」実施要項, 日本財団助成事業, 発達障害幼児等に対する支援ネットワークモデル事業の構築～発達障害の理解と早期支援～.
- 前原市民生部・前原市教育委員会・九州大学大学院人間環境学府研究院(2006) 前原市発達障害特別支援地ネットワーク事業 療育キャンプ報告書
- 前原市健康福祉部・前原市教育委員会・発達障害早期総合支援モデル協議会(未刊行). 就学移行支援キャンプ報告書. 前原市発達障害特別支援地域ネットワーク事業 (発達障害早期総合支援モデル事業)
- 大神英裕 (2008). 発達障害の早期支援—研究と実践を紡ぐ新しい地域連携—. ミネルヴァ書房.

¹ ここでの外部助言者には、特別支援学校教諭、教育学部系の大学教員、社会福祉士、言語聴覚士、作業療法士、臨床心理士、臨床発達心理士、児童精神科医などが含まれる。

² 「今のすがた」は、「生活」と「自立活動」に大別される。「生活」は「読み書き・計算」「食習慣」「排泄」「睡眠」「着脱」と各領域において、「自立活動」は「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」の各領域において支援計画作成時の児の様子を評価・記述するものである。

³ 以下の1.ポラリス、2.長期目標と短期目標、3.4月5月のりきりシートに関する記述は特定の個人に関する情報ではない。

⁴ 以下の参加者アンケートの回答についての記述は特定の個人に関するものではない。